

# アルコール家庭で生まれて

中田幸次

酒と一口で言うのはたやすいが、その酒に泣いてきた、私がいいます。

私の小さい時から、父は酒ぐせが悪く、私も母も、弟も妹も、寒い夜空の外に追い出されました。近所の牛小屋に母子で肩よせ合って朝までいて、朝早く家に帰りカバンだけ取って学校へ行くのです。その時、腹がへり、足元は氷ですべる、泣きながら学校へ行く途中で、近所の人のかわいそうに、またあそこのおやしさんは、子どもたちまで外におい出して、酒飲んでいたらしい」という声が聞こえてくるのです。小学校2、3年生の頃から、私の耳に入る話は、いやでいやでたまりませんでした。その中で、少しずつ父の顔色を見て生活するようになりました。

酒は飲む、夜の夜中に酒を買いに行かされる、そんな父を見て、これが、親のすることかと子ども心に傷ついたことは、何十回、何百回あったでしょうか。

小学校4年生の夏休みに入る前だったと思いますが、父と母が家からいなくなったことがありました。私たちは、なぜ2人ともいなくなったか、とまどいと、これからどうすればよいのかという立ち込める不安とが頭の中を駆けめぐりました。

その時、姉や弟が「兄ちゃん、腹へった、何か食べるものなか？」と泣きながら言いました。

私は、家にあったそうめんを鍋一杯にしょうゆ味で作って妹や弟に食べさせました。あの時のことは、今でも忘れることはできません。それから食べる物がなくなって、すぐ近くに住むお婆の所へ行きました。

「お婆さん、とうちゃんもかあちゃんも、どこ行ったかわからないから、タバから水だけ飲んで何も食べてない」と一言で言ったら、「ばかたれが、早ようタバの内からここに来なかったか」と一番上の私に向かって涙ながら言ってくれました。お婆の一言に妹や弟とうれし泣きしたことを昨日のこのように思い出します。

何日か過ぎて、母が帰り、また父が家に帰ってきました、二人揃って、お婆の所に来て、おまえたちは、子どもたちの

ことをどう思っているのかと怒られているのをみていました。

私は子ども心ながら、無理をして家にいるより、私の家にきたらどうかと前々から言ってくれていた従兄弟の豆腐屋に世話になろうと思って、小学校5年生の時に家を出て行くことにしました。

その家の朝の早いには驚きました。まだ夜中の3時だというのに、みんな起きて仕事をするのです。朝から豆腐売りをしますが、その準備をしなければならず、私は朝から大忙しでした。

私の田舎では新聞配達をする仕事はなく、貧しい家の子どもが5、6人、朝早くから豆腐屋に来て、豆腐売りをしてから、学校へ行っていました。そういう子どもたちがいたので寒い冬でも苦になりませんでした。

父のだみ声を聞き、いつ外に放り出されるかわからない生活からすれば、そこは天国でした。従兄弟たちは私を大切にしてくれましたが、私なりに気を遣っていたように思います。

雨のふる日も、風のふく日も、泣きながら、豆腐を売って、手にはしもやけ、赤ざれで痛いと言って、泣いて帰る家もなかった、それでも私は三度の食事も食べさせてもらって小遣いももらって、学校も出してもらってよかった、幸せでした。

しかし父は、酒に酔って豆腐屋に来ては、少しずつ貯めてきてはおばにあずけてきた小遣いを取りあげて、私の頭を風呂を炊くマキでなぐっていき、酒代にしていきました。親とはとても思うことができない、と心の中で思いました。

当時の頭の傷は長い間、一本の古傷として残っていました。

話しは、少しずつ前へ進みます。

中学校も豆腐屋から入学し、母のかわりに、その家にいた女性、姉のように思っていた人が入学式と一緒に来てくれました。優しい女性で、うれしかったです。入学してからは、3年生を早く卒業して田舎を出たい気持ちばかりでした。

昭和38年3月18日、京都へ行きました。そこには従兄弟もいたので、仕事は建築でした。

京都タワーがまだできていなかった頃

で、京都タワーの建設にあたって、1人の職人さんにぼうずから仮枠解体という仕事を仕込んでもらっていたのですが、その人は、仕事が終わると酒の世界だったので、私はそれがたまらなくいやでした。

酒を飲まないなら、休みの時がつまらないだろといわれて、日本生まれで日本育ちの3歳年上のイギリスの女性を紹介されました。外車はある、時計がほしいと言うと時計屋の前に車を横づけにして、セイコー5を買ってくれた女性、今はなつかしい人として心に残る女性でもあります。そんな中で酒がつきものとされる職場はだめだと思い、京都から大阪に行き働きましたが、そこでもまた、酒飲みばかりの職場でした。

知り合いを頼って東京の新宿四谷に来てしまった私は、人のつてで人材銀行という職場で働き始めましたが、どうしても働いてほしいという人がいて、喫茶店で働くようになりました。昼間だけ働き夜は好きな人とデートにあけくれていきました。それが良かったのか悪かったのか、いつの間にか結婚話になったのが昭和44年12月の末のことでした。酒は飲まない人だったので、女性の親もとに行き、結婚をしたいと言って住み始めた所が四谷4丁目でした。2人で働いている時は良かったのですが、46年8月に女の子が生まれました。それからが大変でした。私一人が働いても生活ができなくなり、嫁の家から月末になると生活に足りない分をもらうようになりました。嫁の母が孫を見たさに金を持って来るようになり、それがいやでした。

私なりに働き、酒の付き合いは誘いがあっても断りながら、道草もせず家路にまっすぐ帰る日々が続いていましたが、ある朝、嫁に、「今夜から晩酌したいから、酒買っといて」と言いました。嫁は「いいですよ」と言いました。

私は仕事の疲れを癒やすつもりで飲む酒にしようと思ったのです。仕事から帰ったら卓袱台の上に4合ビンが1本置いてありました。

嫁は「2日で1本飲んでくださいね」と言い、私もそのつもりでしたが、4合ビンのふたを開けてコップで飲み始めた

私は、4合ビン半分飲んでビンにふたをしようと思いはしたものの、ふたができて4合を飲んでしまいました。飲んだ酒ではたりない酒になっていました。その夜から、酒乱の酒が始まったのです。

酒は飲みたい、酒はない、道路を隔ててあったスナックにある酒を、私は夜の夜中に嫁に出刃包丁をもって嫁をおどして、買いに行かせました。それが、私と酒との出会いです。

嫁は目に涙をため、片手に小さい子どもを抱き、片手に酒ビン持って帰ってきました。その酒で一夜寝るようになりました。

それからというもの、仕事が終わったらまっすぐ帰っていた私が、会社の仕事仲間を私の方から誘い立ち飲み屋、スナックと行くようになりました。ある日、外で飲むだけ飲んで家に帰ったら、卓袱台の上に晩酌する酒がなく、それに腹を立て卓袱台は引くり返した所までは覚えていますが、何時間か過ぎていたのでしょうか、嫁が幼い子を抱いて部屋の片すみで涙して泣いていました。部屋の中は夕食のおかずやごはんがいっばいにちらかすようになっていたので、「これは、だれがしたのか」と嫁に聞いたら涙声で「自分がこんなにしたくせに」といわれて、びっくりするばかりで何も言い返す言葉が見つかりませんでした。それからというもの、会社に出ても家に帰るのも大儀になり、寝に帰るだけの家になっていました。

昭和48年11月、寒い夜中のことでした。いつものように外で、たらふく酒を飲み帰って今夜も嫁にスナックへ酒を買いに行かせるつもりでした。その時の嫁は娘を抱いて、片手に4合ビンの空ビン持って外に出ていました。私は、今夜は、どうして娘まで一緒に行くのかと思い、千鳥足で外に出て見ると、2人はタクシーが通る道路に逃げるようにして行きました。嫁に「どこに行く？」と言声をかけたら、その声で振り向いた嫁の顔は鬼か夜叉に見えました。その顔を見て飲んでいた酒も一度に冷めました。

それが、嫁と娘の最後となりました。部屋に帰って少しの荷物を持ってすぐ下の弟とタクシーで東京駅の八重洲にまで行く途中では何度も弟に「義姉と別れろと言っただろう」といわれました。東京駅の八重洲口の夜中の待合所ではストーブはついていましたが、酒が切れかかっている身体は、震えと汗がとまらない状

態でした。下りの一番のひかりに乗るまではどうしていたのか、「ブラックアウト」で覚えていません。

大阪に着き、難波のスナックで働くようになりました。最初はまじめに働き信用が付き家のカギも店のカギも預かるようになりました。やがて、早くに店に入り小ビン2本飲んで、店の仕事がオープンすると客と一緒に飲む、店が終わるくらいになると、ベろベロになり、そのうちに、店のボトルに手をつけるようになっていました。当然ながら、店主は私にいやな態度をとり始めるようになり、久しぶりに田舎に帰るからと言うと、「また来たら」と、まとまった金もらって九州に帰ることになりました。田舎に帰って、少しの間は親や身内も大切にして、酒を飲ませてくれましたが、そのうちに飲む金もなくなれば、朝早くから漁師は漁に出て当たり前で、そんな従兄弟たちの家に入り酒を何日も飲んでいました。従兄弟たちは母に愚痴をこぼし、母は私に「もう大阪に出て行け」と言い、金を用意してくれました。一番のバスで田舎を追い出され、バスと電車を乗り継いで、博多に着いた時には8合くらい酒を飲んででき上がっていました。大阪までのキップは買うが、電車の中でもまた酒を飲み、新大阪で降りた時には2個持っていた荷物は1個になっていました。

酒を飲む中で仕事は長続きはせず、身体をこわして一般病院に入院しました。その病院で1人のナースと知り合い恋仲になり、身体を治して退院しました。お金がなくて、その女性にアパートを借りてもらって仕事に行きますが、長続きはしないのです。酒に飲まれることを何度か繰り返しているうちに、昭和59年6月9日、小杉クリニックにその女性に連れて行かれました。父も田舎から来ていたので、3人でクリニックへ行きました。その時のソーシャルワーカーが佐古さんでした。

小杉先生に「もう、酒はだめです」といわれても、病気だといわれても、アル中なら、酒やめようと頭でわかっている、やめる気がない、酒に飲まれながらの生活となり、小杉先生に叱られたこともありました。それから、私なりのどん底の生活が始まりました。手は震え、飯を食べようとすると吐き気がして食べられなくなり、アルコール専門の泉州病院に2度入院しました。2度目の退院から11日目にはまた、ワンカップを手にし

ていました。親しくなった女性に「2度も入院してまだ酒飲むか…」といわれました。起きたら2個の荷物が私の横にあり、女性に「この荷物持って、明日、一番電車で出て行って下さい」といわれ、一銭なしでは大変だろうからと、駅でキップ買って改札口でお金は渡しますといわれました。改札口で5万円もらいましたが、これでまた酒が飲めると思いました。朝から飲んで夜になったら、小銭が180円だけ残っていました。

その後、飲み続け幻覚と幻聴で大変な思いをしました。困って、以前、相談したことのある保健所に行きました。精神保健相談員と面談した時に「中田さん、落ちる所まで落ちたな。今の姿、うしろの鏡で見てみ」といわれました。目と口の所までカサブタでいっばいで、今にも血がしたたり落ちそうでした。シャージの上下は血とほこりで汚れきっていました。私は、それでも生きたい気持ちがあったので、専門病院にもう一度だけ入れてくださいと言って、新生会病院に入院しました。そこで、アルコールで死ぬということを知り、退院したら、断酒会に入って酒がとまるならがんばって例会を回ってみようと思いました。病院を退院して1年間、毎日、例会に行くのは、口では言えぬ辛さがありました。いろいろは酒をやめても5年間はありました。しかし、1年過ぎてから、例会を大切にしながら仕事をするようになり、一時家庭をもちました。しかし、縁がなかったのか、何年かしたら一人暮らしをするようになっていました。会社を54歳でやめた私は、屋の居場所に困っていました。前から知っていた、「リカバリハウスいちご」の佐古さんと面談して「もう来てもいいですよ」といわれ、「矢田いちご」に通い始めましたが、あの頃は何か一人でよく怒っていました。そこで気持ちの整理や他人との会話の仕方など、忘れかけていた物を1つ1つ取り戻すように、朝のミーティング、昼からの生活技能や自己表現トレーニング、外の作業、介護の仕事などをしました。いろいろなことがマイナスからプラスになるまで、どん底からはい上がってくる私には、二重苦も三重苦もありました。

それがあったからこそ、いちご作業所のミーティングを人以上に大切にしてきました。また夜の自助グループの断酒会を大切にして、人の言うことに耳を傾けてきたおかげで、立ち直ったように思い

ます。首まで酒の中につかっていたのが、夢のようです。

これからも、人と人との「和」を大切に前を向いて生きていきます。身内とも少し距離をとって生活することで、今は何事もうまくいっています。